



HOKKAIDO UNIVERSITY

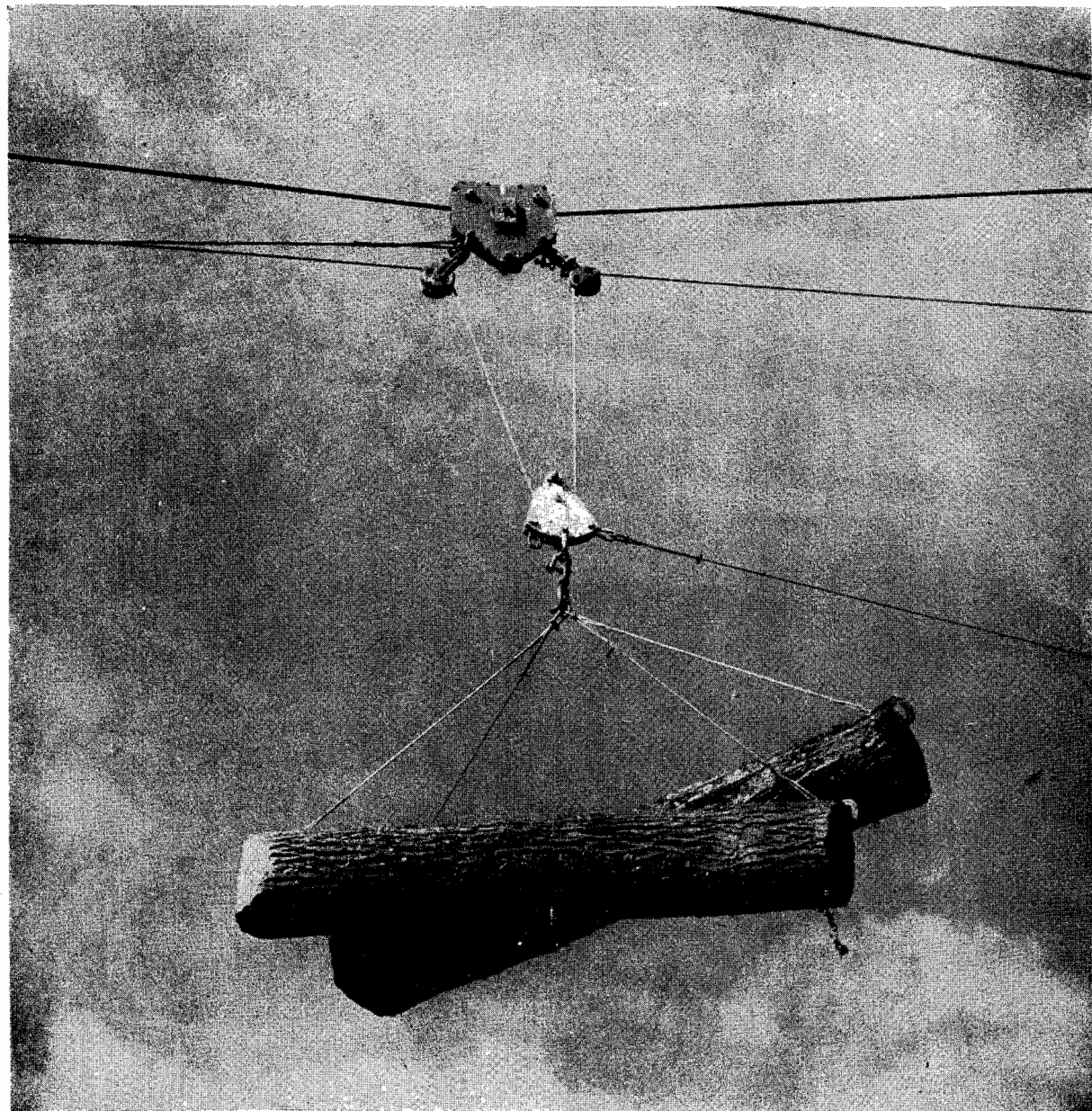
Title	オンドル
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Citation	技術と社会 : 機械化した林業, 10, 6-7
Issue Date	1951-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78357
Type	journal article
File Information	C009_0110.pdf



TECHNIC & SOCIETY

技術と社会

10



機械化する林業

北海道科学技術連盟

新らしい出発にあたって

科学技術連盟の新しい性格と事業に関する理事会案は、数回にわたる研究の結果、ようやく確定をみるに到つた。

社団法人化を機会として、北海道科学技術連盟は、従来の行きがかりを一掃して、社会、人文、自然の諸科学の領域にわたり、業界、教育界とと學界、官界にあるとを問わず、ひろく提携協力して、北海道の産業と生活と文化の向上のために奉仕することをもつて最高の目標とすることになった。

今後産業、生活、文化などに關する諸調査研究も、またこれらの結果に基く産業や行政への働きかけ、道民の生活や教育への浸透もすべて道民の生活と文化の向上に役立つことを最高の指導原理として行われることになるし、連盟を運営し、または事業を行う機關もすべて、この目的にそつ形態を取るようになるであろう。

我々はそれぞれの職域において、日々その専門に應じて社会人としての仕事を果しているけれども、高度に専門化された近代の社会は、専門化と同時に、総合化された機能をも持たなければ、専門的職域においてすら業務の發展を期することが困難になるのである。

研究室の窓を閉じて、科学の三昧境に遊ぶことをもつて足れりとする特權的學究の徒はいざ知らず、科学の方法と成果を道民の生活と文化の向上のために捧げようとするものにとつては、専門家の組織と同様に、各界各分野にわたつて、一つの目標によつて結集された総合的な機關が必要である。

わが北海道科学技術連盟が、今後果さんとするのは以上のごとき機能である。この機能が正しく、強く果されるか否かは、北海道の將來の運命を大きく左右するであろう。

連盟の現會員は、それぞれの立場と判斷に基いて、正會員として連盟事業に積極的に参加するか、または普通會員として、機關誌を通じてこの事業に聲援を送るかの道を選ばれるとともに、連盟の新しい性格に基いて賛同者の入會を新たに勧誘せられたい。また賛助會員は、その財政的援助を通じて育成せられた當連盟が新しい飛躍の時機に到達したことを認められて、さらに一段の援助を與えられることを切望するものである。

目次

ずいひつ	1
冬の生活と道民性	吉田 博
冬の食生活	前野 正久
生産基盤の確立と資金	横山 幸生
不思議なこと	二瓶 端
考える習慣を	佐々喜久恵
防霧林の研究	今堀 克巳
宗谷地方の印象	香山 勲
北水試創立50周年記念式に當つて	大島 幸吉
接連調査レポート 昭和26年度調査の要約	調査部
試験研究レポート	20
接連マンスリー	21
すき間風	更科 駒緒
冬の寝室	山下秀之助
オンドル	鈴木榮太郎
寒さに耐えて	菅 忠行
夏に養え	熊谷 綾雄
接連ライブラリー	20
書面による連盟總會の施行について	22

冬の生活と道民性

吉田 博

道教委が調査した“北海道民性”なるものによると、長所としては、生き生きとして行動的、粘り強く勇敢、樂天的で大まか、卒直で感激性に富む。反面、短所としては野性的、ざつぱくで科學心がない、同志的結合を作りやすいが排他的信仰心に乏しく安住性を欠く、のださうである。(10月25日道新) どういう方法で調査をして結論を出したのか判らないが、うなずかれる點がすくなくない。

今年の夏も多くの視察者を迎えた。それとともに多くの北海道の印象記もあらわれた年である。私の手許にもいくつか掲載されている四、五の雑誌や單行本もたまつてゐる。これらの印象記を書いた人々は、一、二を除いては春から秋にかけての間に北海道を眺めた人ばかりである。しかし例外なく、冬の北海道の住い方と住宅の問題、というよりは家屋構造から受けた冬の住い方を、一應は俎上にのせてゐる。

6月に根室まで旅行したローベル・ギラジ氏(ル・モンド紙日本特派員)とは一タを共にしたが後日婦人公論誌でこう語つてゐる。……私は、住民達が北海道の氣候に適應した新しい建築様式を考えもしないで、こんな薄つぺらで貧弱な家屋にどうしてがまんして住んでいるのか、理解に苦しむ。スイスの家屋は丸太で、壁は二重にしてその間に薄い金屬板をはさむので、室内はとても温く住心地がよい。北海道の家屋が本州と同じ造りであ

る事は驚くのほかない。

また、かつて共同通信札幌支社長として在札した佐藤喜一郎氏は

「改造」でこう述べてゐる。

……寒さを防ぐ赤煉瓦の建物は北海道の首都札幌においてさえ道廳のほか二、三にとどまり、住宅に利用したものは軒もない。みんな内地同様の疊敷で、障子と床の間がちやんとつてゐる……。

こういうわざわざ室内の熱を屋外へ放散するような家屋の構造も元をたゞせば移住民の内地へのはげしいノスタルジアのなせる業だとおもえば、にわかに煉瓦造りだ丸太小屋だと合理主義一點張りの住宅に切り換えるのも、あるいは考えものかもしれない。

永戸氏はエコノミスト(9月1日號)で、

……アメリカの文化や産業の中心は大體北緯40度から50度の間で發達した。英國は一段と北によつて北緯50度と60度の間で今日の大をなした。スエーデン、ノルウェーの兩國に至つては、北緯55度邊から70度まで食いこんでゐる。こうした國々の例に照らすと、たかだか北緯40度から45度邊までしか伸びてゐない北海道の冬を、これからの日本の総合的な文化によつて征服するのは決して不可能ではなさそうにおもわれる。烈しい風雪にも堪えるがつちりした住宅は見るとにたのもしい安定感を與えるものだ。

北海道も處によりけりだろうが、いわゆる内地式の手輕な住宅では第一、冬の燃料にも無駄が多かりうし、風雪に對しても安定感を欠くのではないかとみた。だから北海道の知事なり議

員なりが、良い意味での野心家ならば、耐寒式の住宅を一軒でも多くする事に大いに努力してしかるべきだと考えてもみた。

まだ他にも類似の印象記があるが、それはさておき色々書きたてられて、道民自身は北海道の住宅や住い方になにひとつ意見も不満もないのであろうか。北海道民が日本で一番住い方についての感觸も科學性も持ち合わせがないという錯覺を起しそである。信州の農家の住宅などはどうであろうか。東北地方の日光を遮斷した、あの暗い陰鬱な農民の日常の住いはどうであろうか。さかのほれば、日本が滿洲に大學進出した當時の、北滿の壁もつかないバラック建は、耐寒とはどう説明つけられるであろうか。これも當時としてはかくせざるを得ない事情があつたからに他ならないのであろう。

私は、すくなくとも戦前までの北海道の住宅建設に、また住いかたには斯くあつた北海道の事情を理解するのだが、こういふと私自身も三世の辯解ということになるのであろうか。

道が今年の3月に行つた世論調査の一問題

「北海道をもつと明るい住みよいところにするためにはどんな施策が一番必要だと思いますか」の答は、「住宅事情の改善」が最も多い率を占めた。しかもその解答者の年令別構成は次のとおりである

20~29	30~39	40~49	50~
男 10.8	14.7	13.8	14.3
女 29.3	20.7	19.7	11.5

男よりも女が強い欲求をもつており、その年令層も比較的若い世代に分けられているのも興味深いし、考えさせられる。

一晩寝てさめれば枕もとまで雪が降り敷いてゐる農家の家もある

冬の寝室

山下 秀之助

「冬の寝室」というと、アプレ
映畫の題名みたいでいささか恐縮
ですが、實はそんな煽情的なもの
でなく、ごく平凡なお話に過ぎな
いのです。手つとり早く申しあげ
ると「冬は冷たい部屋に寝ましょ
う」というだけのことで、それも
何らむづかしい理論つきでなく、
私の年來行っている瑣末な健康法
を恐るおそる聞いて頂くだけのこ
とです。

私も昔は適度に保温された部屋
に寝ました。寝る時はさすがに氣
持が良いが、夜中に室温がだんだ
ん下つて寝る時の 15°C位が夜明
けには 0°C 近くなつてしまい、
それに部屋の空氣も乾燥して、鼻
や咽喉の粘膜が何となくおかしく
なり、くしゃみがでたり、涙がで
たりして、ちよいちよい風邪を引
くような仕末でした。

そこで、他の家に引越したのを
機会に、居間と廊下を距てた小部
屋を寝室と定めて、全く火の氣の
ないままに寝ることにしました。
しかし、それにはちよつとした工
夫がいるのでありまして、寝る直
前に居間のストーブをどどん焚
いて、寢巻のまま體全身、ことに
足先を十分暖め、さらに足に毛糸
編みの足袋をはいて、そこでいよ
いよ氷室のような寢間に飛び込む
のです。しかし、なんといつても
足先が暖まるのがなにより大事
ですから、一番寒い眞冬になつて
毛糸足袋だけでは足先が暖まらぬ
時は湯たんぽを豫め夜具の裾にい
れておきますが、これも寝る時は
必ず取りのけてしまいます。入れ
たままですと、うつかり火傷する
こともありますし、また第一邪ま

になつて、氣
持良く、のび
のびと眠れま
せん。

なお、大切な
ことは、冬に
疊の上に寢床

を直かに敷いて寝ることは疊と
いう固體からの冷えが直かに傳わ
つてきます上に、床下からの隙間
風がどうしても、はいりますので
防寒上不利であります。ですから
床はフローリングで十分張りつ
めて、ベツトに寝ることにしてい
ます。そして、外氣に接する方の
窓には内側に厚いカーテンを一ぱ
いにかけて、外からの直接な冷氣
と隙間風とを防いで、室内の空氣
をできるだけ靜かに保つことが安
眠の上に何より必要であります。

以上のことを實行するようにな

オンドル

鈴木 榮太郎

四年間ばかり京城に住んでいた
間は、冬の寒さもオンドルのため
にほとんど苦にならなかつた。零
下20度ちかい寒さの日にも、オン
ドルの中には春のようなやわらか
な暖かさがあつた。京城にいた日
本人の家は主として日本式住宅で
座敷や洋風の應接間にはストーブ
を用いてゐたが、居間はたいてい
オンドルになつてゐた。書齋兼座
敷をオンドルにしていた人もあつ
た。オンドルには疊を用いないが
一間の内を二分して一方をオンド
ルにし、一方に疊を敷いてであると
もあつた。オンドルには朝夕
二回石炭が薪を入れると、4時間中
つねに暖かであるから、そのまま
温室にもなるのであつた。葱の青
い葉を水盤の中に育てて一冬中

つてから夜は良く眠れますし、風
邪もなかなかひかなくなり、昔な
がらの頭寒足熱の理屈にも良く適
つて大變に宜しいようです。そし
て時々旅行して、旅館や温泉など
でストーブを焚く部屋に寝かされ
ますと、宵の口は暖かすぎて汗を
かいたり夜具をはねのけて兩手を
出したりして寢相のわるいところ
を發揮しますので、きまつて明け
がたに冷えこんで風邪をひいてし
まいます。だから冬の旅行は私に
は大禁物です。

最後におことわりいたしますが
夜中、寢巻をコンスタントに保温
できる設備のある文化住宅にお住
まいの方々には、今の私の話は文
字どおりの「寢言」に過ぎないだ
ろうと、眞に恐れている次第であり
ます。 (札幌鐵道病院長)

楽しんでい
る人もあつた。
オンドルの暖
かさは非常に
やわらかであ
る。煙や埃が
すこしもた

ないので清淨でもある。燃料はス
トーブにくらべて著しく經濟的
であつた。

札幌にきて一番いやなのは冬で
ある。寒さである。吹雪の吹き込む
バラック建ての住宅、ストーブの
煤煙。けれども、もしオンドルがあ
ればここでも冬の苦惱は半減する
であらう。朝鮮に住んだことのあ
る人も札幌には澤山いるであらう
のに、どうしてオンドルが從來こ
こで用いられていなかったか、私
はそれをふしぎに思つてゐる。日
本は大陸にくらべて温度が高いた
めに梅雨のころにオンドルの中が
刷れるとか、材料の石が無いため
だ。などという人もあるが、そんな
ことはない。たとえ幾分そんな傾
向があるにしてもすこし工夫すれ

ばすぐなんとかなることである。

私は嚴冬の間に南鮮にも北鮮に
もたびたび旅行した。どんな山奥
の貧農の家にもオンドルはかなら
ずあつた。オンドルはそんなにむ
づかしい技術も材料もいるはずは
ない。北海道でどうしてこれを用
いてこなかつたか。技術や材料の
點にあるのではない。なにかもつ
とつまらぬ理由によるものであら
う。道内の建築の企畫や指導の立

寒さに耐えて

菅

北海道に住んでいる人々の誰も
がよく知つてゐることを、改めて
とりあげてみました。

☆北海道は1年のうちの半年近
くは冬である。春も秋もほん
のわずかの期間しかない。そ
れで1年の半分近くを寒さに
耐える生活をしなければなら
ない。だから北海道に住む人
の一生の内の半分は寒さとの
たたかいである。

こうなると道民たるもの寒さが
どんなに私達の生活の上に重苦し
く壓しかぶさつてゐるかに、いま
さらのように驚かざるを得ないで
あらう。

寒さとのたたかい

寒さとたたかい、寒さに耐えて
生活する道民にとつて生活の向上
とは、寒さが楽しい生活をさまた
げたり、生活の上に重苦しくのし
かかつてきて生活水準を下げたり
することをすこしでもすくなくす
ることである。積極的には寒さも
楽しいという段階にならないとほん
とうの意味の北海道の生活の楽し
さ面白さ、張合りは生れて來ない
であらう。

寒さを楽しくうけいれ、絶對的

場にある方々に一考も再考もわず
らわしたい。

しかし私は北海道の住宅文化は
オンドルができればそれでもう満
足だとおもつてゐるのではない。
それはとんでもない話だ。北海道
は耐寒の必要という點から、せめ
て住宅だけは日本内地より余程立
派なものでなければならぬ。しか
るに事實は、その住宅も隙間だら
けのバラック建てが多い。

な寒さを人間
の頭で克服し
て、人間の味
方にし、生活
の上に寒さを
逆に利用する
ことである。

忠行

寒さと生活との結びつき

生活の要素とは衣、食、住であ
る。ここで又ありふれたことであ
るが、それを取り上げなければな
らない。

1 衣 からだが寒さに負けて
しまわないだけの、寒さからから
だを守るためにまず衣の問題があ
る。保温的なしかも丈夫な、でき
ればそれを北海道で自給できるセ
ンイ資源とその工業化とが先決問
題である。北海道の羊毛とその加
工工場の問題がここで登場してく
ることになる。

2 食 生きんがために食うの
でなく、食わなければ生きてゆけ
ないし、寒さに耐えるためには米
ミソ、醬油などの含水炭素食糧だ
けではダメで、どうしても脂肪分
を食べなければならないし、米の
絶對量が不足する北海道の主食の
轉換、それにとまなり副食物もし
ぜんに變つてこなければならなく
なる。バター、食用油、ジャム類
鹽魚それに漬物もタクアン漬や白
菜漬などの從來の米飯に適したも
のからいくらか變つてこなければ
ならないであらうし、パン食、馬
鈴薯の調理方法の研究と普及など

思いきつて煉瓦作りかコンクリ
ート造りの洋風にきり替えるなら
それにこしたことはない。その場
合はもちろんストーブであらう。
しかし和風をつづけるならオン
ドルをつけるがよい。北海道の生
活水準が内地なみになるのはまだ程
遠いようだ。家を見るがよい、家
を。これで半歳の雪の中の生活を
すごすのである。

(北大文學部教授)

が眞剣に考えられなければならない。

3 住 なかなか簡単に解決で
きないのが住問題であるので、空
念佛になつてもほとんどの人がだ
まつて見送るせいか、かえつて政
策の一方の旗頭にとり上げられて
いる。住宅の改善というと、すぐ
新築と思う人が多いし、政策でも
新築の面に重點がおかれ、いま住
んでいる家のどこをどの程度改善
したらどうなるという面の對策と
調査と啓蒙が、大切な割合に軽く
扱われている。それに直接家を建
てる大工さんが、むかしのままの
大工さんではいつまでたつても家
はよくならないし、新しい建築材
料や、小部分改善の指導を、ジミ
な仕事であるがとりあげてほしい
ものである。

どうすればよいか?

どうすればよいかとなると、す
ぐ先立つものが金、ゼイタクだ、
トンデモナイ、とうつつやりをく
つてしまつては獨り相撲よりもつ
とおかしなことになつてしまふ。

1 衣 道の緞羊は農業センサ
スの倍以上いることが業者仲間
で言われており、業者が扱う羊毛の
生産量からもうなづけることであ
る。しかもその羊毛の大半が、道立
種羊場の羊毛までが東京、大阪の
大會社に持ち出されてスフと混つ
て加工されてしかもその内の一部
分しか北海道にかえつてこない。
北海道に梳毛工場の新設と紡毛工